

埼玉育ちのグローバル人

百聞不如一見～私の個人的日中交流～

第1回「16歳、中国へ飛び込む編」

平成23年度「埼玉発世界行き」奨学生 大内 洸太



● 「えっ、高校で中国に留学？」

「高校時代、中国に留学をしていました。」と言うと、「北米や豪州ならまだしも、高校で中国に留学、という選択肢はあまりないものですよ。」と言われることが多いです。なので、まずは僕が中国に興味を持ったきっかけから書いていこうと思います。

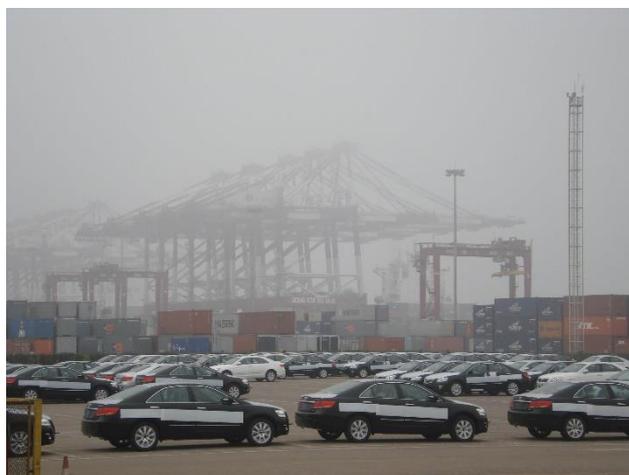
正直に言うと元々、僕はそこまで中国に興味はありませんでした。中国に対してはパンダ、万里の長城、自転車といったイメージで、良く分からないけど、とりあえず隣にある国、それが僕にとっての中国でした。ところが僕が高校に入学した2006年前後、その国が北京五輪を控え急速な発展を遂げる一方、「反日デモ」の映像がテレビを賑わせ、「中国とはどんな国なんだろう」と興味を持ち始めました。

高校で中国語を学び始めると、やっていくうちにどんどん面白くなり、もっと中国語が上手になりたい、もっと中国のことを知りたいと思うようになりました。ちょうどその頃、高校で留学、という選択肢を知り、「じゃあ僕は中国に行こう！」と決意し、高校の中国語の先生の助けのもと、友好校である天津外国語学院（現・天津外国語大学）附属外国語学校へ留学することになりました。僕のぶっ飛んだ決定に「自分で決めたことなら」と暖かく送り出してくれた両親には今でも感謝して

います。

● 「あー、あの甘栗の？」

僕が留学した中国の天津という街は、北京、上海、重慶と並ぶ直轄市の一つで、北京から特急列車で1時間（今は高速鉄道で30分に短縮されています）のところに位置する港湾都市です。清朝末期に日本を含む欧米列強の租界が設置された歴史を持ち、今でも一部欧風の街並みが残っています。



天津港は中国有数の貿易港

ちなみに僕が「天津にいました」と言うと半分以上の方が「あー、あの甘栗の？」と反応されますが、実は甘栗は天津市ではなくお隣の河北省、また天津の名を冠する天津飯は日本発祥の料理なんです。天津に行かれたら甘栗や天津飯ではなく、天津3大名物の十八街麻花（ねじねじのお菓子）、狗不理包子（肉まん）、そして耳朵眼炸糕（揚げ饅

頭)をご賞味あれ。

● いざ、天津。

高校2年生の夏、2007年8月、16歳の僕は単身天津へと渡りました。天津外国語学校では現地の高校2年生のクラスに放り込まれ、それこそ学年で「たった一人の日本人」として1年間の留学生活が始まりました。

中国語は日本で1年半学んでいたものの、現地人がCD通りに喋ることはないし、ましてや教科書の例文通りの会話なんて絶対しないし、相手が聞き取れないと「あぁっ!？」で聞き返してくるし、人とコミュニケーションが取れないってこんなに辛いことなんだ、と再認識させられる日々が続きました。

また健康面でも、食べ物や水が合わなかったのか、到着してしばらくは体調を崩しっぱなしでした。そんなわけで、到着から1ヶ月ほどは毎日ひたすら「早く日本に帰りたい…」と願うほどのホームシック状態。単身異国の地に乗り込んだ16歳の僕にとって、それこそ試練の日々でした。



天津で一番賑わうエリア、和平路&濱江道

ここまでネガティブなことしか書きませんでした。帰国する頃には「もうしばらくここにいたいな」と思うまでになります。そこに至る話は第2回目でお話しさせていただこうと思います。